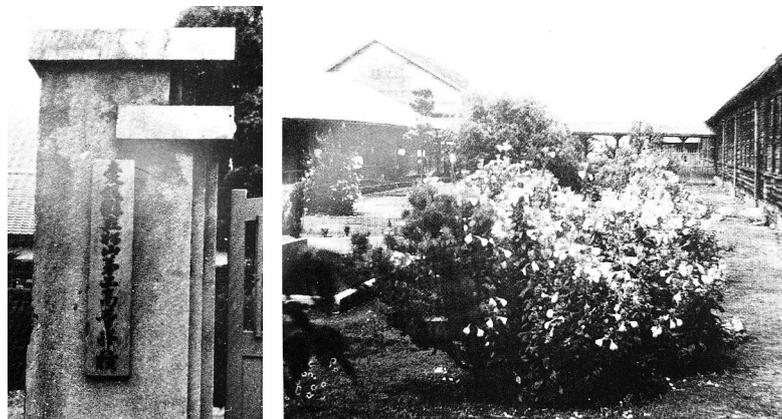


③ 昭和20年代の学校

昭和24年頃の校門と校舎



『創立百年記念誌 南薫百花』より

粗末なバラック建てと、たてつきの悪い入口の障子戸、暗い裸電球、少ない専任教師、加えて冬になろうとするうそ寒さ、それに時間毎に教師自身がリンを振らねばならぬとあって、ひとしおに哀れをもよおすのであった。

しかし生徒たちは案外明るかった。彼等は本当に勉強したいという情熱を持ち、お互い同士尊敬の念を抱いているという生徒たちであった。そして少しでも寒さから逃れ、少しでも明るさを保ちたいと健気に努力する彼等であった。

(初代主事 田井能喜三郎先生の述懐より)

草創期の卒業生

〔第1期生卒業式〕 昭和27年3月

- 全日制と合同で実施
- 卒業生女子24名 (入学時48名)

〔第2期生卒業式〕 昭和28年3月

- 卒業生女子34名 (入学時77名)



卒業式を迎えた2期生

〔第3期生卒業式〕 昭和29年3月

- 男女共学初の卒業生
- 卒業生49名 (入学時90名)
- 男子20名、女子29名

卒業にあたって ~卒業生が述懐した学校生活~

校友会誌『草』より

学ぶことの喜びを知りました。

社会の雑念を払いのけ、出来るだけ童心にかえて学ぶことができた。

楽しい思い出よりも、むしろ苦しい思い出の方が圧倒的であるが、この苦しみこそ真の楽しみであったのではないか。

先生に御心配や御迷惑をおかけしながら、とかく鈍りがちになる足を引き止められた学校は、日々の生活に潤いを与え、慰めをもたらしてくれた。

私の一生の最良の年はこの四年間であったろうと思うに違いない。良き教師良き友は永久に忘れ得ぬ人となっている。

乗り越えても乗り越えても、数知れぬ荒波に幾度飲み込まれそうになった事か…。社会と学園、そこには幾多の矛盾が横たわっていた。ともすれば学生としての本分を無視されがちな社会の流れに、学問を放棄していっそ一思いにとはやまる心にかられて、苦しみから逃れ去ろうとあせった事だろう。しかし私の回りには、善良な心と深い思慮を持った友達が常に見守って居てくれたのである。

伊藤達夫 校長先生の言葉 ~第3期生卒業生へ~



夏の日、一日の勤労のあと汗にまみれたままで勉強をする。冬の日、暖房の設備もなく窓のガラスは破れ、寒風の吹き通す天井も張ってない教室にすわり続ける。あれを思いこれをおもうとき、諸君はよくも青年持ち前の知識追求の情熱が冷却しなかったものだとここに改めて敬意を表する。

校友会誌『草』より